



須千載和歌集  
下

特別  
8099  
15(2)



14  
8099  
15  
(2)

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in dark ink on aged paper. The script is dense and fills most of the page.



< 2001-034 >

續千載和歌集卷第十一

戀歌一

女さつげけり

兵部卿元良親王

わが言はれぬ心もさるるもたれを恋せむらひの心

久安百首歌

皇太后文太皇太后

昔今もわが心もさるるもたれを恋せむらひの心

家内百首歌命初戀

後白河院前太皇太后

あはれけり恋もあはれけり心もさるるもたれを恋せむらひの心

赤元百首歌命初戀

院中御言云雄

限あまの月の田子此袖さへもけりあはれけり恋もあはれけり

初戀縁戀とつるる心

法皇御製

はらひさるる心もさるるもたれを恋せむらひの心

百首歌命初戀

心もさるるもたれを恋せむらひの心

恋は言の中

園光院入道前白河院

わが言はれぬ心もさるるもたれを恋せむらひの心

百首歌命初戀

わが言はれぬ心もさるるもたれを恋せむらひの心

弘長内裏百首歌命初戀

前大御言為氏

我々宗家なるものなりと雖も  
藤原威徳

物々宗家たるものなりと雖も  
前系後實後

かりふたうゆるふあそそり  
藤原宗緒朝臣

あはれとてしるすは  
藤原重顯

あはれとてしるすは  
前系後實後

昭慶門院系

我々宗家なるものなりと雖も  
昭訓門院春日

あはれとてしるすは  
春日社

前大御言為世

あはれとてしるすは  
弘安百首歌

典侍親子朝臣

あはれとてしるすは  
式見門院

長江の東の山にありて神ありてなるをいふ

子言書言命 前大御言兼宗

命をいふは神ありてなるをいふ

百首言命ありて ありてなる

くはありてなる神ありてなるをいふ

ありてなるに 中宮宣言

わらぬは神ありてなるをいふ

贈後三位為子

神ありてなるをいふ

賀友卿久

わらぬは神ありてなるをいふ

平親清女

神ありてなるをいふ

平重村

神ありてなるをいふ

持律師實性

神ありてなるをいふ

宗部之也といふなり

惟宗光吉

わらぬは神ありてなるをいふ

寄安慶也 後三位為信

人ありてなるをいふ

藤原為道朝臣

形はさうしあつて實はかきりてつて切ひの程に書けり

津守國友

と申すは今迄も其の事なりと書りて定まらずにされ

申す所

在原信氏

と終りて山をのよをいふにむねをむねと書きし

は社寺入道兼官百家平一命

基俊

と申すはせうの御持のまゝに其書りて其れなり

齋乃多申す

待賢門院坂行

と申すは其書の程にさうも書かざるなりと書きし

源清兼朝臣

と申すは其書の程にさうも書かざるなりと書きし

は女百首平一命とよらりてさう

前僧正實伊

と申すは其書の程にさうも書かざるなりと書きし

悪意のつて

船山院法親

と申すは其書の程にさうも書かざるなりと書きし

兼道朝臣

と申すは其書の程にさうも書かざるなりと書きし

源兼氏朝臣

と申すは其書の程にさうも書かざるなりと書きし

殿直門院大納言

金重のつなはらふるを浪せかたはらひては

菅原入道兼大納言

よふまじら本は様おぼそちらなり

御一ら次

よ見人志守

ちせら海をまじら道兼はらうと

えふ月のは疾のちと兼は

清少納言

一程はまじら御

忠意よまじら

今上御製

かろき道なるたて

宰相典侍

ち新のち兼は

百首歌守一付

ち政大臣

あまのち兼は

家地兼

法皇御製

池のち兼は

御一ら次

前大納言兼家

ら兼は

今上御製

まきあふのさるまたるゆゑそははひのほのあふれ

正三位為實

かとなつそは舞のあふにまゐりしむじの葉はら

非月乃るらとみらつひそ女あはつらつら

津守国基

はぬこつそは枯のあのをきあつるあはれをれ

若葉とらふそ 前中 袖を為芳

あひのあひのあひまの今つらそのあひのあひ

百首歌もつ 津守国冬

あひのあひのあひのあひのあひのあひのあひ

私安百首并そそまのあひのあひ

入道二京親王性助

新陽明門院兵衛法

新陽明門院兵衛法

あひのあひのあひのあひのあひのあひのあひ

高階宗成朝臣

高階宗成朝臣

あひのあひのあひのあひのあひのあひのあひ

前内大臣

あひのあひのあひのあひのあひのあひのあひ

前内大臣

あひのあひのあひのあひのあひのあひのあひ



久延くし守

ふらむのりそくをいふにやむ人そむの浪のそま  
藤原百首歌をのりそくをいふにやむ

後深草院少将内侍

ふらむのりそくをいふにやむ人そむの浪のそま

藤原百首

中后祐隆

ふらむのりそくをいふにやむ人そむの浪のそま

前信正云初

ふらむのりそくをいふにやむ人そむの浪のそま

深草氏初也

ふらむのりそくをいふにやむ人そむの浪のそま

藤原為親初也

ふらむのりそくをいふにやむ人そむの浪のそま  
或は親王家の言河をそむと云ふもあはる

平時教

ふらむのりそくをいふにやむ人そむの浪のそま  
以長三年九月書由書あはる言河をそむれや守

持中由言云雄

ふらむのりそくをいふにやむ人そむの浪のそま

右京頼泰初也

ふらむのりそくをいふにやむ人そむの浪のそま

百首歌守

少将内侍

よみて移したるそ人若きゆせのしれおつる事  
借入者無きつる方ふを

式部之文明親王

平政村朝臣

平政村朝臣

祝部成重

建長三年九月十三夜十首言合しつる方

前大御之為家

高階宗成朝臣

無事申上

平准貞

藤原基明

藤原為定朝臣

下らるるのむら輝す

下らるるのむら輝す

下らるるのむら輝す

下らるるのむら輝す

下らるるのむら輝す

下らるるのむら輝す

前之西言爲世ま表仰々春日社世首并一

幼風法師姪

あけおすもた夫の父様をふえをそとと悪く程の  
由らぬと仰とあ建とそこえ行くらふ

女清淑子女王

その屋敷とそり仰とそとあそひに袖のあそひ  
若菜百首あそひのそり

僧正行意

そらぬとあそひ浦のあそひのそとそとあそひ人そ  
群らあ

人のそとあそひのそとあそひのそとあそひのそとあそひ

西文大工書

そらぬとあそひのそとあそひのそとあそひのそとあそひ  
天徳四年内裏并合意

中務

ひんあそひのあそひのあそひのあそひのあそひのあそひ  
あそひのあそひのあそひのあそひのあそひのあそひ

今出川院近傍

あそひのあそひのあそひのあそひのあそひのあそひ  
後二条院位にむとくあそひのあそひのあそひのあそひ  
の中とあそひのあそひのあそひのあそひのあそひ

贈後三位為子

らぬまのなきをいふとかなをけりしぬるうき者のいれ

群ら歌

後譽法師

あまのけりあかきふれけり世ふをまけひあひ

法下園伴

あまのけりあかきふれけり世ふをまけひあひ

左京大史実任

あまのけりあかきふれけり世ふをまけひあひ

よんくゝ歌

あまのけりあかきふれけり世ふをまけひあひ

百首歌あり

後三位宣子

あまのけりあかきふれけり世ふをまけひあひ

あまの年内裏より命未言も

前用白太政大臣

あまのけりあかきふれけり世ふをまけひあひ

あまのけり

平政長

あまのけりあかきふれけり世ふをまけひあひ

正三位為實

あまのけりあかきふれけり世ふをまけひあひ

あまの百首あり

入道芥太政大臣

あまのけりあかきふれけり世ふをまけひあひ

菅原白首平正のきりきり言雲三

元山後内大臣

藤原白首平正のきりきり言雲三

藤原白首

藤原賴範女

藤原白首平正のきりきり言雲三

藤原白首平正のきりきり言雲三

入道前太政大臣

藤原白首平正のきりきり言雲三

藤原白首

前用白家

三葉

藤原白首平正のきりきり言雲三

藤原白首

從二位宣子

藤原白首平正のきりきり言雲三

藤原白首

前京雅朝親王

藤原白首平正のきりきり言雲三

瀨天門院

藤原白首平正のきりきり言雲三

藤原白首

入道前太政大臣

藤原白首平正のきりきり言雲三

藤原白首

今上御製

藤原白首平正のきりきり言雲三

三葉入道内大臣

藤原白首平正のきりきり言雲三

百首家集

入道前之政大臣

名高家後乃定後上院（兼）より所をねむりてはる

平一良

法平頼兼

ねむ川をよすむらさきの海の新あをねむりてはる袖

竹律仰園世

らふらふの地まよふとらふらふの地まよふとらふらふ

深兼胤朝臣

ふふふのしむらぎの海とねむらふりのふふふのふ

藤原清隆

世にわが世をたなひに糸をそとをたなひに月をそと

権大御言冬基

そはまりのあふらんやねむらんまはりのそとにねむらふ

家山雲のふをふふふのふ

山階入道友之臣

ふふふのふふふのふふふのふふふのふふふのふ

契後顯重

從三位為理

海と袖あふれぬらんまはりのふふふのふふふのふ

家并命重

富家入道前田白之政大臣

ふふふのふふふのふふふのふふふのふふふのふ

かちゅう

百首家集

入道前之政大臣

續千載和歌集卷第十二

戀奇二

群一八

柿本人麿

石山本葉のよきゆゑのよききりしほひのよき

く見人志次

夕暮れ山をいほり月をみたりけりさるる包をりなせき  
無部々元良親王家奇二合

深宗于胡白

今よりあつらひたてしきゆゑのよききりしほひのよき

無乃言中二

深信明於五

よききりしほひのよききりしほひのよき

崇徳院法皇

あはれを身けの信りかゝるまよひのよききりしほひのよき

古よりよききりしほひのよききりしほひのよき

藤原範永胡白

口を閉ぢて女もいと玉川のよききりしほひのよき

今にや平首ありし定法は丹二

後鳥羽院法皇

留り原のよききりしほひのよききりしほひのよき

群一八

わが意のよききりしほひのよききりしほひのよき

以長由裏白のよききりしほひのよききりしほひのよき

前大御之為氏

かけとこいそく見き一應とふたはあまの山井乃水  
不達意と  
今上御書

淡川志ふとけいふをあらはすれす之のあまを  
初元百首あまの御書

入道前大政大臣

身におまらむありやと人こころも思ふしつこころ  
群ら次  
くま人志守 在系親の

思ひ入ふはるはをそけいさるるはとせん海

邦親親王

初ら兼たかみふとくろくそとては思ふはるは

中務卿宗尊親王

所らりたのまら此御りそきろくろのさひそりん

持少信部澄守

こころの定由乃をたけ系志のらと考し思ふたを

弘安百首あまの御書

二京法親王覚助

そらとあまのこころをたけ系志のらと考し思ふたを

群ら次

永福門院

所らりたのまら此御りそきろくろのさひそりん

弘安百首あまの御書

入道前大政大臣



空の雲をまじりてくさくさ月影をまじりてまじりて

百首歌あり時 民部公實教

とびのけねえあはれなきもよきあはれなきもよき

岸松中一卒とよき

松中ゆき為藤

よゆの雲をまじりてくさくさ月影をまじりてまじりて

私安百首歌あり時

船山院法製

雲の影の輝りたるあはれなきもよきあはれなきもよき

予百首番あり時 宣秋門院丹後

時らぬ雲の影の輝りたるあはれなきもよきあはれなきもよき

形らぬ

大油之御信

よゆの雲をまじりてくさくさ月影をまじりてまじりて

東宮傳師信

あはれなき雲の影の輝りたるあはれなきもよきあはれなきもよき

法華長衆すゝめあり時 播宮公首あり時

松大僧部云順

よゆの雲をまじりてくさくさ月影をまじりてまじりて

無乃あり時 皇后言其侍者

任職の海ありしときあはれなきもよきあはれなきもよき

為道朝臣女

あはれなき雲の影の輝りたるあはれなきもよきあはれなきもよき

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

平通時

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

藤原資明

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

正三位 家

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

前系 議忠定

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

以安百首歌會時 大隆傳

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

系 議雅有

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

系 道躬白

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

藤原 仰光

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

法下 云惠

菅原朝宗の御... 菅原朝宗

祝部 成久

ワニを食む所の浦ありて是をクニノミヤと云ふ神あり

百首言事付 用白内之旨

このやがの物ゆかりの海にうけたりし神ありて

群一と云 位三位親子

くらげの神の居けりて人々を苦しめたる事あり

二所は親王覚助

あまの江にそるる座のなれきりてそるる神あり

永福門院小共未精

物持のなれりてそるる神ありてそるる神あり

尊親法師一説

神ありてそるる神ありてそるる神あり

孫百首言事付 信中細云云雄

そるる神ありてそるる神ありてそるる神あり

百首言事付 信中細云云

あまの江にそるる神ありてそるる神あり

二所は親王覚助

あまの江にそるる神ありてそるる神あり

右政大臣

あまの江にそるる神ありてそるる神あり

急言中 平宣時朝臣

あまの江にそるる神ありてそるる神あり

民部口實教

わんてははとつとるかろひをいふまにむもは

権中御云實前

あつらふ命をいふとる風書道終末とてあつらふや平家

百首あやふ 昭訓門院春日

わろて世あつらふとてあつらふとるあつらふとるあつらふ

百首あやふ 昭訓門院春日

後三位為繼

あつらふとるあつらふとるあつらふとるあつらふとる

昭訓門院春日 昭訓門院春日

あつらふとるあつらふとるあつらふとるあつらふとる

後三位為繼

あつらふとるあつらふとるあつらふとるあつらふとる

文永二年九月十三日

普光園入道前用白丸大臣

あつらふとるあつらふとるあつらふとるあつらふとる

前大臣御云為氏

あつらふとるあつらふとるあつらふとるあつらふとる

平宗宣朝臣

法下定為

あつらふとるあつらふとるあつらふとるあつらふとる

法下長兼

あつらふとるあつらふとるあつらふとるあつらふとる

志

春宮新無傳普17

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

藤原為躬

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

贈從三位為子

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

前住僧正雲雅

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

大中臣為貫實

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

藤原秀長

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

禮少僧部津道

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

法眼兼奉親

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

中務宗尊親王家行合

道法法仲

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

藥師兼法眼

いづれ海にけしと新御加さるる序いづれと

津守宣平

無事の命のそとにまじりてはかたじけなく

有原冬隆朝臣

そのまじりたるはたゞのまじりたるを

後光の著寺極政家百子命之息

源親長朝臣

御事なほはかたの命をたすくを

意中

持大御言實御

命をたすくはかたの命をたすく

喜の事とてあらはせしむる

前大御言為世

おぼしめしはかたの命をたすく

赤元百首言あり付不逢意

とてまじりたるはかたの命をたすく

百首言あり付

三条院法皇

命をたすくはかたの命をたすく

群

後二条院法皇

命をたすくはかたの命をたすく

後二位家隆

命をたすくはかたの命をたすく

弘長百首言あり付不逢意

後二条院法皇

命をたすくはかたの命をたすく

應永中に

春宮太史云賢實

好ひふもよとて好く申されまほしきまうらふとちりなるん

平宣時朝臣

海世のむくもよとて好きまうらふ人の好ひよるん

百首言事一付

藤原為定朝臣

世かけ好ひよきむくもよとて好きまうらふ人

群ら次

中宮

ゆらふもよとて好きまうらふとて好きまうらふ人

前元百首言事一付とて不遇慈

贈從三位為子

そふゆらむもよとて好きまうらふとて好きまうらふ人

百首言事一付 津守国冬

たふらむもよとて好きまうらふとて好きまうらふ人

将中御之為藤

好きまうらむもよとて好きまうらふとて好きまうらふ人

前元百首言事一付

前大御之為氏

ゆらふもよとて好きまうらふとて好きまうらふ人

群ら次

永福門院周防

よらふもよとて好きまうらふとて好きまうらふ人

前元百首言事一付

前大御之為世

新不逢意といふるを  
皇后言

新不逢意といふるを  
皇后言

皇后言

きよひのうらみはのれなみあり袖うらみ  
正三位為實

中臣祐世

平時見

津守國助女

美治百首舟きりきり舟寄歎意

兼大御之為氏

わみらうかひをれうらみあり中其意多不

兼大御

兼大御

うらみの新んせとくもやうきありひこれうらみと

曾祿好忠

花鳥のうらみとくもやうきありひこれうらみと



中務卿宗号親王

不登方知此世ありてこそ是れおほくはあまの御魂とて  
孫を承けし世にありてこそははるけき御魂とて

弘安百有五年のまゝとて

入道前大政大臣

あまの御魂とてははるけき世にありてこそははるけき

建保六年二月度申に之を承けし世にありてこそははるけき

後久我大政大臣

かそこの世にありてこそははるけき世にありてこそははるけき

悪の公とてまゝとて

飛山院沙叢

海山方とて是れとてははるけき世にありてこそははるけき

威明親王

あまの御魂とてははるけき世にありてこそははるけき

深兼康朝臣

あまの御魂とてははるけき世にありてこそははるけき

前大僧正道玄

あまの御魂とてははるけき世にありてこそははるけき

院沙叢

あまの御魂とてははるけき世にありてこそははるけき

家とて是れとてははるけき世にありてこそははるけき

二系は親王覚助

つせんをたふる人の海川をせしきでしつをたふる

能くし原 万秋門院中将

わらえぬかみののけし能くしをたふる海川をたふる

中長祐春

物守字をたふるのなほくもたふるし袖もたふる

津守国平

わらえぬかみののけし能くしをたふる海川をたふる

大石彦彦

いさよたふる若るらの若る河わらえぬかみののけし能くしをたふる

平好氏

わらえぬかみののけし能くしをたふる海川をたふる

礼後文

海川をたふる袖もたふるなほくもたふるし袖もたふる

中長祐秋

わらえぬかみののけし能くしをたふる海川をたふる

後二位御平 平一

海川をたふる袖もたふるなほくもたふるし袖もたふる

前大御之為氏

わらえぬかみののけし能くしをたふる海川をたふる

中長祐雅有

海川をたふる袖もたふるなほくもたふるし袖もたふる

鴨祐治 鴨平

信一そのうゝをよむと書物に金員を奉るは

高階成美

女小孫の物と云ふは新の妻と云ふは

中原時実

と云ふは子孫のたむけのたむけのたむけ

と云ふは

けりて子孫のたむけのたむけのたむけ

新のたむけのたむけのたむけのたむけ

正暦元年正月一日陣方合し

わをたむけのたむけのたむけのたむけ

群一と云 乞則

秋乃新とまゝと申すの功は力奉らした

寛治五年従二位執事乃家守令

持大由言云安貴

新のたむけのたむけのたむけのたむけ

夜慈と 院法製

夏乃のたむけのたむけのたむけのたむけ

新のたむけのたむけのたむけのたむけ

帝大由言有房

と云ふは新のたむけのたむけのたむけ

百首と云 法中定為

と云ふは新のたむけのたむけのたむけ

妻のあはれ申に

後深草院并内侍

あまをいふと今もたはるるにやうなをいふと

贈從三位為子

さうなをいふと今もたはるるにやうなをいふと

法平房觀

そなたのあはれ申に

平宗宣朝臣

あまをいふと今もたはるるにやうなをいふと

中務卿恒明親王

あまをいふと今もたはるるにやうなをいふと

後深草院并内侍

あまをいふと今もたはるるにやうなをいふと

贈從三位為子

あまをいふと今もたはるるにやうなをいふと

平宗宣朝臣

中務卿恒明親王

あまをいふと今もたはるるにやうなをいふと

今上をいふと今もたはるるにやうなをいふと

贈從三位為子

あまをいふと今もたはるるにやうなをいふと

今上御親

あまをいふと今もたはるるにやうなをいふと

あま

續千載和歌集卷第十三

應亨三

題志次

順徳院法皇

よはりのる世のこころをひらけてこそわが心

龜山院法皇

さきもこころのまろくさ書と寝るまにさる人と邦

承元二年世首ありしに約衣

前大納言為世

その心も今もあはれなりとほろりとさるるとき

長乃中

長政大臣

ゆきよりの心もさるゆきよりのほろり母ありて

百首ありて 入道前長政大臣

今もあはれなりとほろりとさるるとき

長乃中

前大納言重

らほりて心もさるゆきよりのほろり母ありて

長政大臣

たのめをさるゆきよりのほろり母ありて

信平の深

偽とほりて心もさるゆきよりのほろり母ありて

平貞時朝臣

らほりて心もさるゆきよりのほろり母ありて

平信時朝臣

約まゝのりやわらと世の力にさかたぬ

律守園世

白たのむをてゆとて思はれや今もいひの歌のうた

弘安百首うちありのまゝ

入道前右政大臣

あはれそとあはれそとあはれまゝの世にたたりけ

前大納言為世

ありあはれたゆとりの言葉もろの地に住むる世

あまの酒を世にまじりて春日社首并中に

法下宗園

この世にわらわりの世にまじりてはまゝの世にた

律守

右大弁隆長

たのむそとあはれまゝの言葉にさかたぬ世の力

前大納言仰長女

あはれそとあはれまゝの言葉にさかたぬ世の力

法眼源

わらわりの世にまじりてはまゝの世にた

赤元百首うちありのまゝ

律守園冬

この世にわらわりの世にまじりてはまゝの世にた

永仁百首うちありのまゝ

為道朝臣

為道朝臣

とまひ月乃命多々たのめとらたり書とをなむいとまは

永仁元年の月十亥新無宿後十有言あらぬ言ふ

狀

津守国助

所そのの海とてなむむをまてあられと書あ月乃命

群

宰相典侍

あせえわたのむらゝのね乃とあけぬ月乃命

大に改国女

あむむとあけぬとあけたりとまひいとまはとあむむ

三善春衡朝臣

約ひて海かろぬと神座よりとけりるをよむ月乃

前中納言資若

こゝれはかどるをいひたかりるゆゑまゝいとまはとまゝ

後三条院位御しとけり人ともあむむとあむむ

中に約夜よりゆきとつぬとあむむ

贈従三位為子

このゆゑむいといひさるりあけぬとあむむとあむむ

意中

前大宰大貳後兼

あむむとあけぬとあむむとあむむとあむむとあむむ

藤原景徳

あむむとあむむとあむむとあむむとあむむとあむむ

平宣時朝臣

あむむとあむむとあむむとあむむとあむむとあむむ

前大僧正實超

わらわは初めは僧正の御影を写す事と仰せられたるに

前大僧正仁澄

月夜に書き置りて思ふに人々の言ふ所の如く

後二条院法皇

子に御影を写す事と仰せられたるに

伏見院法皇

世に傳へられたるに御影を写す事と仰せられたるに

今上法皇

御影を写す事と仰せられたるに

御影を写す事と仰せられたるに

前大僧正實超

わらわは初めは僧正の御影を写す事と仰せられたるに

群臣

後醍醐天皇

御影を写す事と仰せられたるに

御影を写す事と仰せられたるに

中納言家持

わらわは初めは僧正の御影を写す事と仰せられたるに

御影を写す事と仰せられたるに

右近大将道綱母

わらわは初めは僧正の御影を写す事と仰せられたるに

群臣

申言



予はあつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

白首のあつまじく 入道并に改之旨

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

昔よりあつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

群一之旨 弘津氏御旨

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

交治白首のあつまじく 幸ひに幸し寄之旨

七清門院小宰相

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

後二条院御旨

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

昭訓門院持大納言

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

藤原恭宗

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

為道朝臣

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

あつまじく頼むべきた好むをわが世にあらん

入道并上政大臣

形見と此のふとみり世のつらあきあき月夜を母

初逢意

并大御言為世

御集京すそ命と相引風吹かたにたはる公なるる

弘長三年無山殿十首言逢意

光後朝旨

二元申にうれ力いよめあきあきいそふてあやむ

無言中に

上白頼重

うらふさびしほにまなだれあきあきゆきまらるる

法下良兼

かきあはしよひさりのまきあきあきあきあきあき

并大僧正實超

今もさびしうねとわらひあきあきあきあきあき

并大御言為世

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

源光忠朝旨

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

并大御言為世

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

三善康衡朝旨

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

光俊朝旨

きんこまのふりあはれなり ねんくははらひのたまは  
むすこころの詩をよみ合はれしは列位也

源具房朝臣

色はのりけしむとせめてきこしあはれをまよふ列位なり  
むすこ

後三位親子

たふふしむきこしむとせめてあはれをまよふ  
民のく實教

前大納言家雅

うたのころりむとせめてあはれをまよふ  
信平云惠

うたのころりむとせめてあはれをまよふ  
二系法親王家中首より列位

前僧正道性

あはれをまよふとせめてあはれをまよふ  
百首より一付 女将内侍

今上御製

あはれをまよふとせめてあはれをまよふ  
今上御製

遊義門院

あはれをまよふとせめてあはれをまよふ  
春宮侍女有忠

春宮侍女有忠

わびあはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

寒 直法也

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

御 成久

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

藤原秀長

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

藤原基禎

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

三善貞康

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

藤原宗秀

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

藤原宗新

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

大死の隆博

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

松安百首言もりのきり付

藤原宗新

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

藤原宗新

藤原宗新

あはれいそくやふをなむとぬとけきと見えぬはかたし

廣義門院

わが御身まじりやうまふたふれりきこふおとどん  
法皇御製

きんろ神の御まがらふおのけこひの御まがら  
むせとくろの御まがら合事御別業の御まがら  
行方

おのまがらおのけこひの御まがら  
暁達意とていふ御  
今上御製

急そあふ御まがらおのけこひの御まがら  
おのまがらおのけこひの御まがら  
暁達意とていふ御

前開白木改大旨

おのまがらおのけこひの御まがら

百首御製  
おのまがら  
御

おのまがらおのけこひの御まがら

正安元年六月百首御製  
おのまがら  
御

後二条院御製

おのまがらおのけこひの御まがら

百首御製  
おのまがら

おのまがらおのけこひの御まがら

急そあふ御  
前左兵衛御製

おのまがらおのけこひの御まがら

寶治百首方々きりし井てい壽願意

後醍醐院御製

こゝろの初めはあけはらへなきわらむつる後をり  
女もとりかゝりてはらうまら

左近大将朝光

をまらふもれいふそとをさるる朝光御製

百首歌あり時 入道前太政大臣

後と見ゆまはりわらむる御製

群ら次 聖教久世

そけとわらむる御製

女もとりかゝりてはらうまら

参議定經

なやむ御製

女もとりかゝりてはらうまら

おとむる御製

後朝意の心と 遊義門院

鳥の書にわらむる御製

永福門院

わらむる御製

百首歌あり時 二京法親王賞財

今をそとのまらたら別名はひとふ

朝意と 大蔵御隆博

皇女ははるき美武宮の由り初めまらにのり曲敷  
今初めははるき美武宮の由り

祭主伯親

皇女ははるき美武宮の由り初めまらにのり曲敷  
今初めははるき美武宮の由り

家々首首言ふる人約言り付意と

光西寺入道前権左大臣

皇女ははるき美武宮の由り初めまらにのり曲敷  
今初めははるき美武宮の由り

皇女ははるき美武宮の由り初めまらにのり曲敷

皇女ははるき美武宮の由り初めまらにのり曲敷

皇女ははるき美武宮の由り初めまらにのり曲敷  
今初めははるき美武宮の由り

和泉式部

皇女ははるき美武宮の由り初めまらにのり曲敷  
今初めははるき美武宮の由り

源兼氏朝臣

皇女ははるき美武宮の由り初めまらにのり曲敷  
今初めははるき美武宮の由り

後近衛用白前右大臣

皇女ははるき美武宮の由り初めまらにのり曲敷  
今初めははるき美武宮の由り

前大御言為世

今其政乃乃いれを白蓮の教すつたのち行りて

群ら次 津守困道

中其乃乃いれを白蓮の教すつたのち行りて

法下長辨

わさのこいれを白蓮の教すつたのち行りて

格中幼之雄

親の兄かつてを白蓮の教すつたのち行りて

弘安百首言をのち行りて

前系後徳清

そらつていれを白蓮の教すつたのち行りて

今乃鏡のうに書つて

藤原宗秀

存しけしむいれを白蓮の教すつたのち行りて

群ら次 若原利行

ひのけを白蓮の教すつたのち行りて

藤原宗泰

ひのけを白蓮の教すつたのち行りて

業平朝信保康今乃鏡のうに書つて

乃乃いれを白蓮の教すつたのち行りて

ちよあつ神のうに書つて

業平朝信

女



あはれなきそなたよちかやわが秋のふじの道もあはれ  
月夜をさるるのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

中畑之丞補

うらなひもあはれなきそなたよちかやわが秋のふじの道もあはれ  
秋意をよませりやう

大津門院法親

わが心もあはれなきそなたよちかやわが秋のふじの道もあはれ  
百首をよませりやう

左大臣

月おとさるる初とねとあはれなきそなたよちかやわが秋のふじの道もあはれ  
正和三年九月盡日十首をよませりやう  
今上御製

あはれなきそなたよちかやわが秋のふじの道もあはれ  
あはれなきそなたよちかやわが秋のふじの道もあはれ

後鳥羽院法親

あはれなきそなたよちかやわが秋のふじの道もあはれ  
百首をよませりやう

皇太后言文書院成

あはれなきそなたよちかやわが秋のふじの道もあはれ  
二首をよませりやう

中臣祐春

あはれなきそなたよちかやわが秋のふじの道もあはれ  
藤原の朝

まゝのついでにふたつを好む夜の床よりやう

法下園野

とらふふらふと海分れまふとふらふと神の月け

丹波忠守朝臣

乃其此神の海の勝をたまひ書つてき月乃新ふ

道義法師

むしけと海とそふふとふらふと月とふらふと

荻原基有

わらわらと神の海を舟にのりては神の月を

百首あそぶ時

面影をよみかへてはまきと境をこりてはまきと

春宮あつと逢坂増えとふらふと海とふらふと

やうに

権中油玄親房

とらふと海の月を舟にのりては神の月を

百首あそぶ時

前大油玄乃氏

わらわらと海の月を舟にのりては神の月を

むしけと

前大油言乃世

たけとらふと海の月を舟にのりては神の月を

藤原基有

藤原基有

わらわらと海の月を舟にのりては神の月を

百首あそぶ時

堤三位為信

今より今よりひにかよひ多きなるゆゑに

行中御言云雄

今より今よりひにかよひ多きなるゆゑに

并侍政方上旨

今より今よりひにかよひ多きなるゆゑに

後言社と稱て有りきり百首言中下

前大御言忠良

今より今よりひにかよひ多きなるゆゑに

長月の世ぬりころより久しうなる

和泉或部

今より今よりひにかよひ多きなるゆゑに

子孫に伝へ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

續千載和歌集卷第十四

戀奇句

神一ら辰

坂上是則

物少おのり務方孝あそとねと心をむるふら  
柳もろふ今ふかふかありさきてはらうと家

九条右大臣

秋葉のあそがひの麻乃孫とまふくひる成り有

建仁元年卒有方ありきりこや

前中御門定家

かろとふふとね雲乃秋風りり方うはは床の建き

恋の歌中に

後深草院弁内侍

物存の後とらふをまをわつ方乃秋とわつ袖の

前大納言為氏

さそとたぬひとつそ秋の国がりあまをむる

白首番奇令 二條院讀女

石と希苗りわと田いつまそてひくかたらのね思ふ

遇不逢恋といぬらふ

老の老も入道前橋政家言

子はおとらこのの葉は今秋風我方じりさき秋の言

洞院橋政家白首言ふらるる

皇太后后女女修成女

都てこの葉は中流流くわらわ道乃秋の志こ家

家と卒首ありふり作しこき絶意

二京法親王竟助

分そけいあつわらぬ枯かみりみり此の絶意

絶意

并中絶云作

久が家人のうらたあきらめり絶意と云

九条左大臣

その絶意こそゆりたの絶意はこい理あを絶意のま

皇后又内侍

かろひあつてえとや痛のいり相なり絶意と云

あえ百首子とてまうりこ絶意

前大僧正道玄

清縁とてはれかろ人のこは絶意とあるは絶意と云

絶意

行信正慈仙

あそひはこいりてあは絶意とあるは絶意と云

大日廣房

こ絶意のこいり絶意の絶意とあるは絶意と云

源親教朝臣

月影の絶意とあるは絶意と云

左衛門侍云敏

ふみゆくの絶意とあるは絶意と云

正安三年九月晝日伏見殿に清華ありて絶意

こいりて卒首ありふり作しこき絶意

左大臣

その時かひての風をたてて参りて守りてをたて  
群ら衆

露をるるかけし時とてゆきし中より道のま草  
平院侍従

柳をいりてかきりて衣をたて袖のまらまら  
平院侍従

ほしのかつてつとをきけと衣をたてつとをきけ  
藤原雅朝

あらかつとつと袖をたてつとをきけつとをきけ  
右兵衛督教定

あかつとつと袖をたてつとをきけつとをきけ

平時元

あかつとつと袖をたてつとをきけつとをきけ  
前持信正雲雅

あかつとつと袖をたてつとをきけつとをきけ  
正三位御朝

あかつとつと袖をたてつとをきけつとをきけ  
後三位宣子

あかつとつと袖をたてつとをきけつとをきけ  
觀意法師

あかつとつと袖をたてつとをきけつとをきけ

辭教法印

わが身を今公家とせしむるは中何れあり

上は貞重

宗家の御孫とせしむるは中何れあり

前持僧正定顯

夏雲の如きは海に波をたはしむるは中何れあり

平重時朝臣

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

衆議雅理

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

平宗宣朝臣

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

丹波隆長朝臣

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

前田白太政大臣

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

源宗氏

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

百首歌集付

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

あつたはるは海に波をたはしむるは中何れあり

今度は素も終る事と云ふ事ありて

久見介一守

好む事多し其れは人の心と云ふ事ありて

大宰権仲為時

世に袖の衣はかき置けり其れは人の心と云ふ事ありて

女三宮治部

ゆゑの事多し其れは人の心と云ふ事ありて

津守国助

と云ふ事多し其れは人の心と云ふ事ありて

貞治百有年

初山院内大臣

今度は素も終る事と云ふ事ありて

群一守

好む事多し其れは人の心と云ふ事ありて

権中言実前

ゆゑの事多し其れは人の心と云ふ事ありて

中油玄定頼

好む事多し其れは人の心と云ふ事ありて

源邦長朝臣

ゆゑの事多し其れは人の心と云ふ事ありて

為道朝臣





津守困助

命をひかへておぼろしく中まれの力をあつてふ人なれど

群一ら候

前田之臣云

とらふたこの世のつらさをうらまへておぼろしく中まれの力をあつてふ

永福門院

たゞ世の子の心におぼろしく中まれの力をあつてふ

持大御言意季

あまのついでにおぼろしく中まれの力をあつてふ

前田之臣云

前田白方政之臣

たゞおぼろしく中まれの力をあつてふ

高きの中に 平貞俊

甘くてなつかしうおぼろしく中まれの力をあつてふ

平宣時卿臣

今もあつておぼろしく中まれの力をあつてふ

前田之臣云

とらふたこの世のつらさをうらまへておぼろしく中まれの力をあつてふ

前田之臣云

後二位の家

おぼろしく中まれの力をあつてふ

二條院讃波

おぼろしく中まれの力をあつてふ



香多井中に

大花の隆博

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

順徳流法印製

著とてに子体まらけりてあつたての徳也  
月と程やあつたての徳也

信實初旨

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

永仁二年八月十五日

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

大花の隆博

月と程やあつたての徳也

為道初旨

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

新院長法勝

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也

とるものまら牛の面影をけりてあつたての徳也



意方申に

津守国助

可ふや 本ある時月を病より公けり此程のいふ事

後二位の家

聖のちの海とく存月影とそれとふくみ人なるん  
ふれまふいふ事あらと終るるのうふははら 兼世世を  
弘安百三言よりまゐる事

前大僧正隆弁

何うキ乃袖はぬ事とたつる方より方々のいふ事

群一良

平貞資

まはるる方の疾も地もきり程の事や今世ははるる

中位祐春

ねらふこと盛んはさるる方より世またふらるる事

平初氏

わなまのしる事程やなる方よりさるる方より物にさる

初元百首言よりつらさ達不遇意

中位由玄為相

しするる事程も地もまらふのちの事と海の家とさる共

意方申ふ

今出河院近傍

えきとてこのあはるの別りあはるる事かこのあは

中言

いふ事かあはる事とさるる事いふ事あはるる事

百首言より

中言

我のまはひあはすりてはたふはきりてはなむはひあはすりては

年一守 前系護家親

海らうきをそふらうのまをひひそとらうき

比安百のちりてはたふはきりては

龜山院法皇

むせりてはたふはきりては

無言の義徳あり 正三位為實

後安土の御金也のちりてはたふはきりては

秋部成良

年一守のちりてはたふはきりては

平貞文家平一命一書後無

賀之三 友則 兼平 朝臣 宗平 朝臣

後深草院女将内侍

我のまはひあはすりてはたふはきりてはなむはひあはすりては

年一守 前系護家親

海らうきをそふらうのまをひひそとらうき

比安百のちりてはたふはきりては

龜山院法皇

むせりてはたふはきりては

無言の義徳あり 正三位為實

後安土の御金也のちりてはたふはきりては

秋部成良

年一守のちりてはたふはきりては

平貞文家平一命一書後無

賀之三 友則 兼平 朝臣 宗平 朝臣

後深草院女将内侍





未乃初めくさるる夕極むる方とていづるはさるる  
物もさるる女とて人下物とてまゝとていづるはさるる

長部宮元良親王

とていづるはさるる夕極むる方とていづるはさるる  
先後朝片すらりゆけり百とていづるはさるる

前大油之為氏

いとよとていづるはさるる夕極むる方とていづるはさるる  
私女百首言ふとてまゝとていづるはさるる

あえ百首言ふとてまゝとていづるはさるる  
あえ百首言ふとてまゝとていづるはさるる

藍十蔵古歌集卷三下 定為

あえ百首言ふとてまゝとていづるはさるる

永仁三年八月十八日  
永仁三年八月十八日

年中油言云雄

あえ百首言ふとてまゝとていづるはさるる

あえ百首言ふとてまゝとていづるはさるる  
平時敷

あえ百首言ふとてまゝとていづるはさるる

平貞時朝白

あえ百首言ふとてまゝとていづるはさるる

永仁三年八月十八日  
永仁三年八月十八日

恨意  
平秋時

あえ百首言ふとてまゝとていづるはさるる

藤原

藤原宗朝

御覧をすむる母をばはるる人ともあはれなり

毎箇由之旨

ふみまじりてはれを境をすむるを新たる也

美信自書之旨なり

從二位成實

ふみまじりてはれを境をすむるを新たる也

美信自書之旨なり

從二位成實

ふみまじりてはれを境をすむるを新たる也

美信自書之旨なり

院法叢

若くはをえりて海邊のありては神の宮なるを

土御門院法叢

端より袖をあらは海邊の傍りては神の宮なるを

從二位家隆

若くはをえりて海邊のありては神の宮なるを

平時元

若くはをえりて海邊のありては神の宮なるを

律師園世

若くはをえりて海邊のありては神の宮なるを

藤原重徳

なほいふる人よりほかに屋敷のかきとる人ありて

正三位為實

ありてはなほいふる人よりほかに屋敷のかきとる人ありて

藤原白首平太夫のまゝに葬出せ

初山院内大臣

根よりいふる人よりほかに屋敷のかきとる人ありて

藤原白首

真風

白首のまゝに葬出せ

白首のまゝに葬出せ

法皇御製

白首のまゝに葬出せ

藤原白首

正三位光成

白首のまゝに葬出せ

法眼のまゝに葬出せ

白首のまゝに葬出せ

源親教朝臣

白首のまゝに葬出せ

赤大御云通重

白首のまゝに葬出せ

白首のまゝに葬出せ

入道前太政大臣

白首のまゝに葬出せ

平家頼朝

安土門院太貳

北風うらみまよふと三首原露のひらき今もせ

洞院権政家百首あり

前大御言の家

海の心黒のまなげあつていふはさう内とく

久安百首あり

皇太后言の文後成

うらみまよふと三首原露のひらき今もせ

久安百首あり

典侍親子朝臣

うらみまよふと三首原露のひらき今もせ

其本田氏之

うらみまよふと三首原露のひらき今もせ

賀茂卿之

うらみまよふと三首原露のひらき今もせ

平時邦

うらみまよふと三首原露のひらき今もせ

園蓮法師

うらみまよふと三首原露のひらき今もせ

平貞基

うらみまよふと三首原露のひらき今もせ

大石政国女婦

うらみまよふと三首原露のひらき今もせ

藤原経定朝臣

今上もこの世の中は

信實朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣

今上もこの世の中は

藤原為定朝臣





ありて世より海根とありし御方とありし御方の命下りぬ  
赤元百首歌集一付むすしうらむ

前大西云有房

命下りし御方御方ありて世より御方ありし御方

赤元中記

赤元政元大信

教下りし御方御方ありし御方ありし御方

藤原冬隆御方

御方とありし御方ありし御方ありし御方

正三位惟繼

御方とありし御方ありし御方ありし御方

平宣時御方

御方とありし御方ありし御方ありし御方

藤原範秀

御方とありし御方ありし御方ありし御方

御方とありし御方ありし御方ありし御方

恨後絶意

指中御云為藤

御方とありし御方ありし御方ありし御方

建治三年九月十三日御方御方絶意

山平入道前大政大信

御方とありし御方ありし御方ありし御方

百首歌集ありし御方御方絶意

皇太后后文大史後成



予あまのうらみと涙まじりても所いなきはらけの

群一らる

和泉式部

うらみかたふらふらうらみ物とつらうらみ物かた

家一うらみ物とつらうらみ物

左京大史頭補

はらけのうらみと涙まじりても所いなきはらけの

せむ

續千載和歌集卷第十六

雜奇上

嶺石とつらうらみ

園光院入道兼用白鳥の歌

春のうらみとつらうらみ物とつらうらみ物

赤光百首うらみ物とつらうらみ物

信皇法皇

群もつらうらみ物とつらうらみ物

前大御云為世

年とつらうらみ物とつらうらみ物

弘長百首うらみ物とつらうらみ物

赤大御云為家



院百首方より

信皇法皇

いまも民をたもてしとてふたりの力成るるの意は  
前奏後少くまじくゆい遷任の旨とて

格中細末為藤

若くはつれはしりつるなりれりし家とて

初元百首方より

園光院合道前用白

九首折のそりしつれとてきとて

常此折とて

前大御之資季

わが世よりつれはしりつるなりれりし家とて

去此折とて

法務云

いづれもあつたつれとてきとて

入道前之政大臣

まゝにこの世に

正三位実徳

いづれもあつたつれとてきとて

山平入道前之政大臣

川がせをたれとてきとて

平時村朝臣

いづれもあつたつれとてきとて

念阿法師

咲乃の梅花の枝よけ今更那の雲の白くかき  
あえ百首あやもーそれ梅

入道前大政大臣

冬も春も白く咲き下りす更那の袖に梅の風  
あやふ

大徳門院の歌

うねる梅のそよ風あやふ更那の雲の白く  
後二位家隆

吹雪の梅の白く咲き梅の春も冬もあやふ

公應六重田言あやふ更那の雲の白く

そよふ風梅と七重春月とあやふ

大政大臣

うねる梅の白く咲き梅の春も冬もあやふ

あやふ

大徳宗秀

吹雪の梅の白く咲き梅の春も冬もあやふ

前大僧正實超

あやふの梅の白く咲き梅の春も冬もあやふ

道徳法師

あやふの梅の白く咲き梅の春も冬もあやふ

あやふの梅の白く咲き梅の春も冬もあやふ

如教法師

あやふの梅の白く咲き梅の春も冬もあやふ



市大由云為世實家結之三首方合仰時勸

後天氏 法下長舞

世の公家ありては志をそのまじりて山を舟舟也

神ら成 僧正道順

ふりてこれりねとふその海に花をうらみそり

独善法印

わらぬ公家といふまて山病のそとを都り力家

大日宗秀

立由ふふとあひくらりてを都るをそ家此のそ

祝部行親

うらみ氣の都るといふまて山病のそとを都り力家

源重義

吾將心むり機乃らあうむを都るをそ家此のそ

祝部行親

行をそといふまて山病のそとを都り力家

中長祐親

老ら世かこいひあはれむこふまて山病のそとを都り力家

人らあまると機乃花のそとを都り力家

山田法印

りあま世かこいひあはれむこふまて山病のそとを都り力家

神ら成 赤深清門

忠少といふまて山病のそとを都り力家



くえんくわんす

身もふしの言も風もなかな言もさうと頼もさる

平仰親

吹せ成りてさむさうさむさうをむらさき

前二四言を世まきゆ三言をうろたむ

法眼慧誓

頼もさるるをさむさうさむさうを

私女百さうさむさうさむさう

藤原為顯

すえ深のたふさむさうさむさう

前僧心道性もさむさうさむさう

持中油云云雄

午の夏のかれる者の心もさむさう

夕卯夜

伏見院法製

月とてさむさうさむさう

夏夜中

法眼慶朝

帯とてさむさうさむさう

右書信持基氏

ひささうさむさうさむさう

法皇法製

道ありてさむさうさむさう

後一條入道前田曾左衛門



この葉の志は常とすなりやと認るべきなる氣持けり

可成りなす一付 格大由之隠迷

なる所の志乃渡の霧けさう有りけり成るべきに

賀茂定宣

御代に成りては心部を不有りするにまじりぬ

安倍忠顯

存心部の愛敬を有りし所をさめては有り教をさるや

藤原景徳

少くもあれは心部を折るの事乃志は合なりを

高階家後朝臣

約所の公がまゝに成る所有りし事乃志は合なりを

空上人

由りては心部を折る事乃志は合なりを

藤原頼氏

よるに成りては心部を折る事乃志は合なりを

平義政

時を人の心部を折る事乃志は合なりを

真洋上人

一とて心部を折る事乃志は合なりを

藤原長隆

きけりまの袖を折る事乃志は合なりを

志部を折る事乃志は合なりを

藤原隆徳朝臣

多事なるに事して其節を以てしり乃其節に

延平次 藤原時親

其まはれらるる事なきにありしり口はれを其後

其月首今の事其の事しりけりたはれ

つひく 贈法三位為子

いふことしりて其事しりけり神の事しりけり

心也 万林門院

口はれ其昔の事しり神の事しりけり

其家の事しりけり其事しりけり

つひく 入道前右政大臣

わが事しりけり其事しりけり

心也 見えく次

すえ澤の神の事しりけり

前大油を為せし春日社平首言中に

法下宗園

橋をたてし其事しりけり

盧橋と云ふ 平宣宗朝臣

ゆきまこと其の事しりけり

祝部成賢

あひらつむら其の神の事しりけり

以長百首言事の事しりけり

弁又由言為實

かひのまらふりたりし神志のともをよそをねた

平一良

西音法師

かそくと世一あかきと教子まらふりたりあり

平貞宗

塩まらふりたりし神志のともをよそをねた

平広房

ありありとありありのまらふりたりあり

真昭法師

かひのまらふりたりし神志のともをよそをねた

ありありとありありのまらふりたりあり

希又由言有房

ありありとありありのまらふりたりあり

平一良

惟宗忠定

風わらふりたりし神志のともをよそをねた

惟仁信親王

清授川なみく水のたきせかけすき浪のまらふ

水名由來

後二條院清雲

清とありありとありありのまらふりたりあり

世のまらふりたりありありのまらふりたりあり

惟康親王家右衛門督

心授せたりありありのまらふりたりあり

初材の念

僧大僧初野母

今もその心はわが心とていふことかへ道徳なる風

始末の中に

平時夏母

後いふ方もあまたの感の言まの心はあつたを

前大僧正良信

よき心はしつたての物にあらうたを

比宗信

と世に流るる心はつたを

津守国夏

あつた心はつたを

中務宗号親王

わが心はつたを

伏見院法親

吹風心はつたを

後二条院法親

心はつたを

前大僧正良信

心はつたを

前大僧正道玄

心はつたを

家々十首言ませりけりふ迷懐

入道二条親王性助

帯の糸染と染むる花とをいふは  
徳明院運有と云ふ由きは遠くありて  
昔おとあひをいふは

昔藤井入道前ち政大臣

かよひの巻分けはなれど  
よえんくら

今よの巻分けはなれど  
白雲の屋敷に袖はかりたれ  
白雲(Ban'in)の巻分けはなれど

式子内親王

あまのうらみの巻分けはなれど  
ち政大臣

あまのうらみの巻分けはなれど  
袖はかりたれ

左大臣

あまのうらみの巻分けはなれど  
兼空上人

あまのうらみの巻分けはなれど  
今か行院近衛

あまのうらみの巻分けはなれど  
天長二年四月既令市合の風

よえんくら

あまのうらみの巻分けはなれど  
大正政園女

り大そく班ののるをの月を人のをるを

藤原親範

かひの書はさしこの札をたふすを

行風法師

わく歌をいふつうと書はるはる月を

月送客と書はる 赤僧正道性

かひの書はる月をいふをさるを

山家月 津守国平

さるをいふはるをさるをいふを

秋言事 藤原頼景

雲はるをいふをいふをいふを

源親長朝臣

秋言事とあるをいふをいふを

行観法師

志愛おのり物す袖月而て

百首言事 入道赤松大信

かひの書はるをいふをいふを

赤大田言事 氏月乃守るをいふを

平秋世

秋言事とあるをいふをいふを

赤大田言事 氏

かひの書はるをいふをいふを

群一ノ次

祝部成久

若くは神の御子なる地を合為す神を貞

平の氏

尾を袖に袖の月をばるる力をそまじけやそ

平め法師

るに成存の心を候うれきとほれを月をそ

月希述徳と

前大由を為世

と若くは心を候うれきとほれを月をそ

以安首首なるのきりこ

二品法師王貞助

雲のれのかきくをの神の月をそまじけやそ

群一ノ次

藤原保純

若くは神の御子なる地を合為す神を貞

清平法師

子若くは神の御子なる地を合為す神を貞

中長祐齋

若くは神の御子なる地を合為す神を貞

藤原忠純

西けい子若くは神の御子なる地を合為す神を貞

清平法師

若くは神の御子なる地を合為す神を貞

大石隆親

おしりすすり家の徳あるまじうけりおしりすすり

前大細言甚良

口袖しとるのゆかりと見えよ家の徳あるまじうけり

深法兼朝臣

ふゆふ初をそそひけり分母らそとあつらふるから

大中臣永胤朝臣

かたうたはむとてそそひけり徳の袖しとるのゆかり

信原元輔

風をよかそそひけり徳のうたはむとてあつらふる

紅葉とてのわたりとせよれん

菅原孝標女

おしりすすり家の徳あるまじうけりおしりすすり

永仁三年飛山殿十首言ふ小出若書秋

前大細言實冬

おしりすすり家の徳あるまじうけりおしりすすり

中愿師家朝臣

おしりすすり家の徳あるまじうけりおしりすすり

後近傍用白前右大臣家守合朝臣

高階成朝朝臣

おしりすすり家の徳あるまじうけりおしりすすり

中愿師家朝臣

おしりすすり家の徳あるまじうけりおしりすすり



廿首方より世の世をうらむるの初文の付

院抄巻

やうり村のうらむるのたのむる本葉は秋の深からん

秋の深

前大徳之基良

いふまじのいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

大の廣彦

あつきのいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

中旨 祐隆

あつきのいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

丹波尚長 朝臣

あつきのいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

大の貞彦

あつきのいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

秋の深のいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

前大徳之後光

あつきのいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

踏為葉と

前原秀長

あつきのいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

冬夜中に

藤原恒清 朝臣

あつきのいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

あつきのいふまじの村のうらむるのたのむる本葉は秋の深

前僧 云道性

吹そく林やかろくそく書のきんを富んぶるは  
以長三子飛山殿十首うぶ相寒甚

お大御なる家

舞はあやむと舞なむしうておるそ風いよのあふ

舞しうあ 大御門院の歌

かけうのむねあふ葉のむしうりあふうそはさきさき

永福門院

あふそら袖う舞ふ風いじい月と雲井なむしう

持中御言意信

はえらあふあはれらうもるより熱言けいこの月か

よふ人くしうあ

海風吹よあふんあふりき後のはまふより瑞雪

藤原範秀

又の塩浦ののこはくわと浪りうとあふる

津守院因

いふのつは海らるなちより瑞雪ひたのこはあふ

式真門院法更

あふそらあふのこいんあふりきあふりきあふりき

あふ百首あふりきあふりきあふりき

飛山院法更

あふあやむのそりあふむかあふあふひい

あふあふりきあふりきあふりきあふりき

ひつゝとてつる

昔より海を渡るはたのりなるをこそ常にならふ

ひつゝと

入道二京親王性助

そのまじりたるはたのりなるをこそ常にならふ

前大御を為せよとせしめし言ひはたのりなる

法眼の辨

いまは世にあつたてはつる老るるをこそ常にならふ

赤元百首をなす

二京法親王覚助

あつたてはつる老るるをこそ常にならふ

赤元百首

頓河法師

あつたてはつる老るるをこそ常にならふ

赤元百首

あつたてはつる老るるをこそ常にならふ

燦火を

赤大御云為家

あつたてはつる老るるをこそ常にならふ

感書の本を

赤原基任

あつたてはつる老るるをこそ常にならふ

赤元百首をなす

律守国冬

あつたてはつる老るるをこそ常にならふ

赤元百首

三位氏久

二方考とていつとあるて書ぶらつていふ公の言にありき  
あえ百首あやむ付成書

二京法親覚助

かえらぬと物うたあきのかきあつきいふうら  
あ安百首あやむのきりこら

前大細言為氏

海らあきあつていつとあるて書ぶらつていふ公の言にありき  
あ安百首あやむのきりこら

續千載和歌集卷第七

雜奇中

あ安百首あやむのきりこら

毎山院法親

あ安百首あやむのきりこら  
あ安百首あやむのきりこら

法親法親

あ安百首あやむのきりこら  
あ安百首あやむのきりこら

あ安百首あやむのきりこら  
あ安百首あやむのきりこら

はるきるはねの鳥たらのふりて月をふれ

前系議純清

位は方きぬわけえれのりあきし月をふれ

後中油云云雄

すえ深の袖と深きりひひと月とをせに熟かきり

弘安百首ありてに

龜山院法雲

あふは深きけし海やうの月と袖と熟かきり

詩一十

宰相典侍

うらわさる世とす深の袖と月をふれ

前僧正實眼

ひらり熟をかき深きりむらさきの花をふれ

左政大臣

あふは深きけし海やうの月と袖と熟かきり

後僧正道意

あふは深きけし海やうの月と袖と熟かきり

後僧正道意

あふは深きけし海やうの月と袖と熟かきり

法住寺入道前用白由之良乃時の言合と暁月

藤原顯仲朝臣

あふは深きけし海やうの月と袖と熟かきり

秋の比連懐斎より

如願法師

世経の宗ありて其のまじきことごとく如くありて  
月夜の中火 園光院入道前田白藏言  
とてやむやむの如くまじき事なり今月日新  
山果にまじりてついでにゆりて

從三位氏之

はつとてむかへぬ世とてむかへぬ世とてむかへぬ世と  
前大僧正通玄音動寺半良山縁之とてむかへぬ  
皆つとてむかへぬ世とてむかへぬ世と  
前大僧正通玄音動寺半良山縁之とてむかへぬ  
はつとてむかへぬ世とてむかへぬ世と

教こそむかへぬ世とてむかへぬ世と

都一とて

廣義門院

その世こそむかへぬ世とてむかへぬ世と

存とて

前大僧正道昭

世こそむかへぬ世とてむかへぬ世と

謝山乃後寄松述懐とて

権律師津井

仍こそむかへぬ世とてむかへぬ世と

都一とて

よとて

わが世こそむかへぬ世とてむかへぬ世と

内務内侍とて

九条右大臣

好く修りてのちけし山雲の袖巻きとすの御らん  
相智少くもこの相をさうけぬ

前大僧正の号

好く修りてのちけし山雲の袖巻きとすの御らん  
迷懐と  
り然上人

美はそ入あとの言はらむとす世なるもの  
赤えと世首すに山家風

前大僧正の世

山けり相の山家風とす  
二系法親王家中首す山家風

法眼禪僧

好く修りてのちけし山雲の袖巻きとすの御らん  
群らん  
宗親法師

人らと相山家風とす  
洞院権政家乃首す山家

康壁門院の将

山家風とすのちけし山雲の袖巻きとすの御らん  
なるん  
法皇法師

予の好きとすのちけし山雲の袖巻きとすの御らん  
美治百首すに山家風

衣笠内大臣

ゆらりたる志業の心をわけ守る者の功其心さる  
山家山家 後免の者古前権政大右

世のその心をいひまて守はせしむる後免の心  
津守国助

山里におもひおぼせさせ給ふ  
信下良宗守

後免の心とて公の心をいひ守る山里の心  
権大僧部良雲

心けいしむる世の心とて守る心  
延政門院一条

心もいひしむる心とて守る心  
入道親王守国

心美の心とて守る心とて守る心  
平宣時朝臣

心ゆえん心ゆえん心ゆえん心ゆえん  
惟宗時後朝臣

心屋や心屋や心屋や心屋や心屋や心屋や  
寛政三年大外記よりして心屋

心屋や心屋や心屋や心屋や心屋や心屋や  
中原師範朝臣

心屋や心屋や心屋や心屋や心屋や心屋や  
西園寺入道前左大臣守任約よりして心屋  
弁大僧心慈法



おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて  
ぬ

神代紙のふかしの袖とすのふしにおもひをたて  
皇太后文とすのふしにおもひをたて

淡天門院

おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて  
心也

皇太后文

おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて  
大御言實國

大御言實國

おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて

おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて

清少御言

おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて  
忠義のふかしの袖とすのふしにおもひをたて

左近大将朝光

おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて  
近衛大将のふかしの袖とすのふしにおもひをたて

山平入道前太政大臣

おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて  
おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて

おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて

おのゝみけのふかしの袖とすのふしにおもひをたて

秋の門田の事なるも事としくなる事世り成るは

述懐を

法平栄美

ころすは月日はをせはる浪をさるるをいふ

法三位純

新嘉の事とてあきあつそられ袖のゆけり

舟のゆけりゆけり事なる事なる事なる事なる事

ての事なる事なる事

法式部

軍方の海はゆけり事なる事なる事なる事なる事

法平

相模

うは世なる事なる事なる事なる事なる事なる事

藤原清心

命なる事なる事なる事なる事なる事なる事

法平後登

かきりたる命の事なる事なる事なる事なる事

平約氏

とて世なる事なる事なる事なる事なる事なる事

亦大僧正道なる事なる事なる事なる事なる事

法平

は世なる事なる事なる事なる事なる事なる事

法眼新

えはる事なる事なる事なる事なる事なる事

藤原利行

とまをなむを智く考ふ其のゆへにせらるる海を  
丹波長有朝臣

らるるや守伊勢の命とて半中より乃力とすけふ  
権中細言云雄

よ命とて海をみるはせふ平乃とてははてしなく  
赤元百首言す一これ述懐

昭慶門院一条

力たさのさうかたにけしむいよゆき来とてはけえ  
津守困哉

おもしろき事とていふもやゆき来とてあかひを  
藤原長経

藤原長経

とまをなむを智く考ふ其のゆへにせらるる海を  
よ久しう守

力たさのさうかたにけしむいよゆき来とてはけえ  
惟宗行政

おもしろき事とていふもやゆき来とてあかひを  
前右衛門侍基顯

かきやむを智く考ふ其のゆへにせらるる海を  
春宮侍と更有忠

とまをなむを智く考ふ其のゆへにせらるる海を  
赤元百首言す一これ述懐

民部之實教

年月日... (faded text)

仁尊... (faded)

極義門院

... (faded text)

天皇陛下之慈勝

... (faded text)

平宗宣朝臣... (faded)

本條

法平定為

... (faded text)

迷懷... (faded)

前内大臣云

... (faded text)

平貞宣

... (faded text)

平政長

... (faded text)

度會延誡

... (faded text)

平氏村

... (faded text)

... (faded)

... (faded text)

源親教朝臣

いふ世にけりやむ世にたふさく世にたふさく世にたふさく

後醍醐天皇の御代

軍師より三行をたてておこなひし事なほ

百首言事

前大御方大臣 押切

代の徳をたてし事なほ

群一

中占祐

世にたふさく世にたふさく世にたふさく

世言言事

前大御方大臣

徳をたてし事なほ

世言言事

中原師宗朝臣

徳をたてし事なほ

寄題述懐とて

源有長朝臣

徳をたてし事なほ

群一

前大僧正守誉

徳をたてし事なほ

法下 後誉

徳をたてし事なほ

前大僧正實業

徳をたてし事なほ

法下 良宗

徳をたてし事なほ

法下園伴

時乃此志の孫ありていふをいふなりと云ふ事ありていふ事あり

持僧正道意

うたはれぬる事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

持僧正覚園

世にていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

大宰持仲實香

後世にていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

法眼幼洲

今にていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

大改大臣

わが心ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

二京法親王覚助

今にていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

前大僧正慈雅

今にていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

持僧正辨俊

今にていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

大宰權帥實香

増りて心もなほおこしけしきかゝるを其ををりけり

藤原保純

我座の物人の世に世とてかゝるおこしをわらわす

百首言事

前用白太政大臣

おれをも君たはをさうおこしつりぬるを其は其行

果れよのそんて人の心とてつりぬる

丹波長有朝臣

世をなして其物をさうおこしをさうおこしを

群一ら次

從三位執事

何れも宿のひり此物さうの心物との心をさしき

從二位頭氏

位山かてまはるおれ物の心とてその心を

寄道述懐とてぬる

前又僧正道昭

又ひり山かてまはるおれ物の心とてその心を

此安百首言事

前又御言御能

二代を君たはをさうおこしをさうおこしを

前元百首言事

一条内大臣

そらの心もなほおこしをさうおこしを

百首言事

前白内大臣

とあるは、この流るる水は、その流るる所、清らかなる所、流るる所、  
中流の清らかなる所、流るる所、清らかなる所、流るる所、清らかなる所、

前大徳云後定

よふ昔より、よふ昔より、よふ昔より、よふ昔より、よふ昔より、

前大徳言為世

里まて世に、かゝるる、かゝるる、かゝるる、かゝるる、かゝるる、

中流云雄

いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、

徳徳のなと 飛山院抄巻

この國の、今も、今も、今も、今も、今も、今も、今も、

前僧云胡

かゝるる、かゝるる、かゝるる、かゝるる、かゝるる、かゝるる、

宗瀬述徳とらるる、とらるる、とらるる、

法中禅隆 隆一

海川の、海川の、海川の、海川の、海川の、海川の、海川の、

前大徳言為世

前大僧云道玄

この世の、この世の、この世の、この世の、この世の、この世の、

僧心道性

一徳いふ、一徳いふ、一徳いふ、一徳いふ、一徳いふ、一徳いふ、

源貞頼 貞



のりよふにふたはさむけに安んずりてん終るまむの心  
系議雅治  
まゆのほひのりてん終るまむの心  
新後楊上りてん終るまむの心

平貞後

いふらふらりてん終るまむの心  
為世のまゆのりてん終るまむの心  
朝昔とせらるる終るまむの心  
仰付むとてん終るまむの心

藤原景徳

こらふとめりてん終るまむの心

市大御を為氏續拾遺をいへたる寺ありてん

惟宗忠宗

和方浦よりいふらてん終るまむの心

藤原忠定朝臣

とらふとめりてん終るまむの心

藤原葉連

せうらんの浪りてん終るまむの心

度會朝棟

ゆえの石とてん終るまむの心

む葉集と名とてん終るまむの心

行々僧部純信

わかれおるはもとよみくまをさしむる見し孫とあはれ

浄徳寺とてあきなりねにかきつけのり

常陸井入道前太政大臣

きとさけらちんしきとせし橋ねらるる人しりあに  
かた橋よりほおとすられしゆけしゆいりあゆふ

順空上人

わかれおるはもとよみくまをさしむる見し孫とあはれ

以安百首のり

民部卿資宣

すれせうぶるはもとよみくまをさしむる見し孫とあはれ

和らぬ

柱ノ備都實譽

建一

年月とあはれだ橋よりしははひのてすてせとあはれ

藤原隆信朝臣年平くあはれしゆけしゆいりあゆふ

ゆきあはれしゆけしゆいりあゆふ

後法大寺左大臣

あはれしゆけしゆいりあゆふ

如

隆信朝臣

あはれしゆけしゆいりあゆふ

うけし

續千載和歌集卷第十八

雜奇下

冠志下

中御之朝忠

昔のそとをのこはたれちかひしう成とゆへ

よんくうら

わが身をまをれを丹の朝に飛ひのち袖のこを

園光院入道兼用良俊

よりのあはれや抱えをとも月影をぬひくをり

月ササ権ササ懐ササ舊ササとぬ

藤原忠資朝臣

あはれかたの介のあけやそとをまのひくを

有月とある

しんまはたひのやと鳥の朝らり月をさす

信太もしくまの背首直志とありて首首

約するは井と對月悲昔とある

後二条院法皇

あはれ抱ひし志のつと月をさす

あはれ抱ひし志のつと月をさす

慈道法親王

ひまをさすを若の月をさす

年々

雲禪法師

と秋のつとを月の影をさす

幼業法師

乃其教のこれ教を其の如くしうの教を其の

法下玄守

何の事かあるたのむらん月をひくく乃其の如く

如園法師

又其の如くしうを其の如くしうの如くしうの如く

雨中悲音とてなることあり

圓光院入道前田白太政大臣

昔の如くしうを其の如くしうの如くしうの如く

群一と云

惟宗忠秀

乃其の如くしうを其の如くしうの如くしうの如く

法下顯範

又其の如くしうを其の如くしうの如くしうの如く

丹波長有朝臣

又其の如くしうを其の如くしうの如くしうの如く

圓光院入道前田白太政大臣

又其の如くしうを其の如くしうの如くしうの如く

今に卒首ありて其の如くしうの如く

後鳥羽院法皇

又其の如くしうを其の如くしうの如くしうの如く

懷舊の念

前參議雅有

又其の如くしうを其の如くしうの如くしうの如く

掲懐舊とぬと云

藻壁門院女将

わが風もあまのきよきつじくもあふられむしうかちら

彩らぬ

天台座主慈勝

敷くまのあふらむしうかちらむしうかちらむしうかちら

く免へしう

ゆ未と想らむしうかちらむしうかちらむしうかちら

宗就姫君

わがれをなむしうかちらむしうかちらむしうかちら

藤原盛徳

海はむしうかちらむしうかちらむしうかちら

祝部貞長

まきふゆきふしうかちらむしうかちらむしうかちら

菅原基有

あひそのちれむしうかちらむしうかちらむしうかちら

園光院入道前用白之旨言

すけのちれむしうかちらむしうかちらむしうかちら

御草子らむしうかちらむしうかちらむしうかちら

西部々文教

ゆき昔そりむしうかちらむしうかちらむしうかちら

彩らぬ

祝部行氏

むしうかちらむしうかちらむしうかちらむしうかちら

二系法親王性助

又源光に奉り奉るゆへに御心を養ひて之れを以て不遇也

伏見院の母首の御方のまゝ

伏見院の宰相

親法と稱すの奉り奉るゆへに御心を養ひて之れを以て不遇也

徳女の名

平辨時

ひとあつた御方のまゝの御方のまゝの御方のまゝ

平

行運法師

その世に御方のまゝの御方のまゝの御方のまゝ

前大僧正深惠

世の御方を世に御方のまゝの御方のまゝの御方のまゝ

よ見人

山崎の御方のまゝの御方のまゝの御方のまゝ

方平の御方のまゝの御方のまゝの御方のまゝ

前右大臣

今頃の御方のまゝの御方のまゝの御方のまゝ

明玄法師

何れの御方のまゝの御方のまゝの御方のまゝ

法橋相三

うまの御方のまゝの御方のまゝの御方のまゝ

平夏時

うまの御方のまゝの御方のまゝの御方のまゝ

関原基久

かきもたけらけつひとてととひのうふ世にさひつねある

平宗直

けりあきあひをす世帯のうらやなしくよひを世

藤原重徳

とひも後ろふと思ふをてふ世にまぶあふりえ

右原頼氏

世にさつねふととれをれうき力あふと頼氏の世

前右兵衛督教定

とひも念すそめゆきけうと世にさひつねある

中白祐春

しらすのむらさきとてそれを信をそめとてさるるあは

源隆恭 隆

ふ世にさひつねをそめあまのふら山あはにすらと

昭慶門院一条

所まそらと海とんかあはさきあまのあはにすらと

平時常

捨をさひのらとて今世のうさとて作ひあはとてあ

権大納言兼季

かりをそめ世帯のかり乃宿にそめとてあはとてあ

院清製

あひの屋からあはあはの世にさひつねある

前象後雅考

予ふゆゑをひきて居てさきだんをいひてはせまぬふ  
年一ら次 示證上人

格大僧却巖歎

わのそとに身ありやき指あをんを世といひて居  
うたふにありそその世と思ふにうらむとるり方あははは

平宣時朝臣女

まはる世といふ力金力ひひるふにたをむをむをむをむ

格少僧却定宗

身を我を公の申し成し守れうとてひをばらまひ  
赤元百首あそむこれ述懐

格中細云云雄

あけうようはもいなるまきとてむいふ真いのは  
ねる一とら次

すそ世のきやそあそ今をなほま身之風を我のまに  
お家乃はさき中かうけり世はぬれ今境をたぬ

入道前太政大臣

あつちたれとけりふんとのそを世その女に成る  
あつち

よけるあつちとけりては世をききあつちとけり  
あつち

善好法師



よあてをいひ物さるるをいひてすはるるをいひて  
宗蓮法師世のれれとき必て出づるに  
後徳大寺大僧正

世のれれをいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
宗蓮法師

人々のあつたのれれをいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
常盤井入道前太政大臣

ちあつたのれれをいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
入道前太政大臣

うれれをいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
前系議實後を家たはるるをいひてすはるるをいひて  
入道前太政大臣

おき世手のいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
前系議實後

すはるるをいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
後系入道前太政大臣

いひてすはるるをいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
弘安百首をいひてすはるるをいひて

いひてすはるるをいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
平宗宣朝臣

いひてすはるるをいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
順助法親王

いひてすはるるをいひてすはるるをいひてすはるるをいひて  
順助法親王

と稱すや地ゆかしてすれは世の事を人向ん

右兵衛督基氏

と見えたるを乃孫ありの事とせよるの事なれ

二弟法親王覺助

はるるあやの事なりはれはるるに

藤原冬隆朝臣

ふたはれはるるの事とせよるの事なれ

持少僧却澄舜

卒の事なりはるるの事とせよるの事なれ

前大僧正仁澄

念はるるの事とせよるの事なれ

藤原威徳

とありてはるるの事とせよるの事なれ

前大僧正良誉

華はたかりありの事とせよるの事なれ

式乾門院法連

是をたかりありの事とせよるの事なれ

前元百首方等

ち政大臣

はるるの事とせよるの事なれ

三善為連

はるるの事とせよるの事なれ

よき人なり

世にまゝに流るるをわが心で好むはるるを

中務卿具平親王

世にまゝに流るるをわが心で好むはるるを

わが心

續千載和歌集卷第五

新編

新編

後京極攝政兼左大臣

清きくもその心は清きくもその心は

百首ありき

法皇御製

今をわが心は清きくもその心は

新編

寛仁法親王

清きくもその心は清きくもその心は

後鳥羽院が

わが心は清きくもその心は

循明門院大貳

むらさきのあまのこをよきかたうあくもれ海の手あはるうさ

也

右近大将通忠母

かえそとえ海をけりけりあつひもかきいあや

右大臣于時大御言

権大御言を基さうの根さり

ゆきかこいひ力海りてはけりて家を次年有昔

移さてつら昔 園光院入道前田白大政大臣

移さむり余のそよ移さき移さきをけりけり

也

右大臣

かえすよこをけりけりを移さてまをるまもかきいあ

新院内侍

大御言御氏

わさりの藤小倉さうかきいけりけりけりけり

新院内侍

物敷の花まうけりけりけりけりけりけり

永福門院内侍

かえりてかきいけりけりけりけりけりけり

永福院内侍を移さいそ

前僧正道性

けりけりけりけりけりけりけりけりけり

慈道法親王

かえりてかきいけりけりけりけりけりけり

伏見院の事させりけりけりけりけりけり

く見ゆ書り

昭慶門院一系

うたはのれり物なほしうーさくすもやとわろく袖の如

希大御云為成御由りも後十三事とあり書り誦神の

まけ物とあり

上政大臣

口見すも清り勢の業統さうそはあいのそくは別を

也

希大御云為世

今所てさす物の業統さくえあり勢のふひのそり形を

ありありゆきさうへり勢とありあつてそのそり人けり

とあり

く見くーり守

清りそく勢の形はあいのそり海とありそりわろ袖の形

船山院かたれそりそり昭訓門院以下はろそ

所多村入道希大政大臣とありつうとあり

伏見院以製

希大御の袖のそりも書清りわろはれとありそり

伏見院かたれそりそりそりそりそり

式部省之明親王

希大御のそりけとありそりあひの形はれ形は

希中御言定家ありゆりも後希大御云為家漢蔵大臣

家一任ゆきとあり

後鳥羽院下野

そりそりそりそりそり

希大御云為家

也

名や之をふのまにまゝにすゝめし時自ぬさるの枯るふ所  
は等此法下竟竟存の摩ろ種すともま違ふれ  
枯のま種あはげさう家と尸てゆけま  
くらひ存の摩ろふまのさふら種なる枯のたふ  
伏見院のまをすまの枯のまをさふら種なる

判宰相

時自今も枯るもさるまをさふら種なる枯のたふ  
女部門院のまをすまの枯のまをさふら種なる  
ありまの  
まをさふら種なる枯のまをさふら種なる  
赤大油云為氏力まると長月の日ひまらふ

わろの守心津守國助と申すゆけの妙事に

法下定考

まをさふら種なる枯るもさるまをさふら種なる  
京極院のまをすまの枯のまをさふら種なる  
間ふれまのまをさふら種なる  
赤大油云為氏  
母力ゆりてのらまをさふら

如後遠久

まをさふら種なる枯るもさるまをさふら種なる  
入道京親王深性之れゆまの枯のまをさふら種なる

平宗宣朝臣 法中行深

平貞時朝臣力由りてのら廢の昭なきこと

平宗宣朝臣

平宗宣朝臣力由りてのら廢の昭なきこと  
平宗宣朝臣力由りてのら廢の昭なきこと

山中入道前大臣大臣

山中入道前大臣大臣  
山中入道前大臣大臣

大納言長雅

前系後雅有

前系後雅有  
前系後雅有

源信明朝臣

源信明朝臣  
源信明朝臣

後人

後人  
後人

大宰大臣重家

後醍醐天皇の御代に於ての世にきりぬけりしと云ふ事あり

如

後惠法師

仁徳天皇の御代に於ての世にきりぬけりしと云ふ事あり

前僧正道性

仁徳天皇の御代に於ての世にきりぬけりしと云ふ事あり

前大御法良教

仁徳天皇の御代に於ての世にきりぬけりしと云ふ事あり

前大僧正深惠

仁徳天皇の御代に於ての世にきりぬけりしと云ふ事あり

後三位氏文

平貞房

仁徳天皇の御代に於ての世にきりぬけりしと云ふ事あり

平貞房

仁徳天皇の御代に於ての世にきりぬけりしと云ふ事あり

平貞房

平貞房

仁徳天皇の御代に於ての世にきりぬけりしと云ふ事あり

平貞房

仁徳天皇の御代に於ての世にきりぬけりしと云ふ事あり

平貞房

平貞房



さうらうを海軍にさしてを風着あを神の

神の御心

格僧正 愚淳

凡ちるまをまをさし平を清あをまをまをまをま

母の御心はゆるまをまをまをまをまをまをまをま

と免る

津守 園冬

うらむの心を結ぶまをまをまをまをまをまをまをま

音書 愚淳

格僧正 覚園

まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまをま

まをまをまをま

格大僧 勤忠性

まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまをま

平時常 勇御りまをまをまをまをまをまをまをまをま

後にかかると人のまをまをまをまをまをまをまをま

平氏村

心をかかると人のまをまをまをまをまをまをまをま

後一位 貞子 勇御りまをまをまをまをまをまをまをま

まをまをまをま

格中 愚基

幼き頃のまをまをまをまをまをまをまをまをまをま

後二條院 清忠の格とて十首言ふまをまをまをまをま

格印 覚寺

まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまをま

神の御心

式部 院 清運

まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまをま

三乘入道由之良女力まるといふ事なり

或部之光明歌

此のほろろの世に清くはまをたのむそとて  
近湯用白力まるといふ事なりけり

高階宗成朝臣

あいらぬそとびらさひのちとせは  
藤原理深の良女まるといふ事なり  
此のほろろの世に清くはまをたのむそとて  
近湯用白力まるといふ事なりけり

蓮生法師

わらわらまの余とありて

并文心とて歌のまの

前文信正道昭

平貞時朝臣力海りまるといふ事なり  
平貞時朝臣力海りまるといふ事なり  
平貞時朝臣力海りまるといふ事なり

近原重徳

このほろろの世に清くはまをたのむそとて  
平貞時朝臣力海りまるといふ事なり  
平貞時朝臣力海りまるといふ事なり  
平貞時朝臣力海りまるといふ事なり

近原重徳

いさよの世に清くはまをたのむそとて

觀意は仰り申すに於ては眼をさして

藤原基任

たらしめし時よりそ有るまゝにさしあつてをたす  
母の申すにまゝにさしあつての御事申すに

左大臣

之をゆきまゝにさしあつてをたすに  
後高倉院の御事申すに

常盤井入道前大臣

ぬきあつての御事申すに  
贈法三位為子力まゝにさしあつてをたすに  
之をゆきまゝにさしあつてをたすに

行風は姉妹

昭訓院春日

みまの御事申すに  
わきまの御事申すに  
為道朝臣十三宮の御事申すに

藤原宗秀

その御事申すに  
平時村朝臣力申すに  
その御事申すに

平時仲

その御事申すに

飛山院十二子の以佛事乃其母の事同國同好の  
守所入る事と下りてくまら

亦僧正道性

く今も子れ海よりとす存ありたすそを此好の源  
藤原雅行かまるをせし御侍加階志のりく  
却りて下りてゆけき

亦系議雅有

百ん此子れたらのの位ありとき世とむん  
まうか

續千載和歌集卷第二十

賀賀

寶治百首より守所は井くの壽日祝

後醍醐院法製

く今も子れ海よりとす存ありたすそを此好の源  
藤原雅行かまるをせし御侍加階志のりく

一乘内大臣

氏厚く國ゆりて清成されをそそ子れ好の源  
建保三年八月中歌ありて月命をりてを藤原  
ら建もるは井く

順徳院法製

此より行イなるのわらふはらうり月をせり影をた

秋のふと 七清門院法製

雲をよめるのたむ後かけやふ世のすく子後分

竹とよませゆり 後二条院法製

わらうたの百方代とゆつあふりぬ重なるは法守所

園融院法付崇徳にく子自ゆりふ

法成寺入道前住法成法製

ひよとそと中をせむらむるむのわらうけししき屋をん

兼曆二条内裏後番平合子自

前中御之匡房

空よりの子のわらきうとやと方代たるまはとゆく

華ら次 大勢の有家

子自よりこわらぬあはふりかするをよせけはとあ

子自と秋とつるうをよませゆり

法皇法製

智をそそあはひん初来ららせれまのくかまを

文保元年守右衛門のゆけり自方たるく西園寺

法華ゆり次の年此守持り初華ゆりうらに又

言のそりまのまをよせけはと入道前

法成寺のゆりつとんこれゆ

やゆりまはひとらむと若かりらるひそらそよ世初を

法成 入道前法成法製

はつとくしんせいのまゝとあはれさしひのたのむまの世業に  
竹鶴と 伏見院法製

しきのあはれしんせいのまゝとあはれさしひのたのむまの世業に  
乾元二年二月由裏あし竹鶴年たしぬとあはれ  
つうしんせいのまゝとあはれさしひのたのむまの世業に  
万秋門院

常あしあはれしんせいのまゝとあはれさしひのたのむまの世業に  
大田乃親の法あしひのたのむまの世業に

前大田云云任

ゆゑをのりらの書いさるてとあはれさしひのたのむまの世業に  
建久元年五十首あはれさしひのたのむまの世業に

前中田云云定家

あはれさしひのたのむまの世業に  
永仁二年由裏あし三首あはれさしひのたのむまの世業に

とあはれさしひのたのむまの世業に 左大臣

あはれさしひのたのむまの世業に  
国光院入道前田白乳安二年二月ゆふとあはれさしひのたのむまの世業に  
ゆけつとあはれさしひのたのむまの世業に

伏見院法製

あはれさしひのたのむまの世業に  
国光院入道前田白乳安

あはれさしひのたのむまの世業に  
たのむまの世業に  
心懸二年田白言がうりて丹白業もあはれ

養子ゆかり

後近衛田白前左大臣

このまゝにわかれと今よりそまゝにせよとけしき

いぬ

伏見院法書

あつたまひさうかきひらきなりいさむせやけん

禁中りき

後京極権政前左大臣

新乃下の新柄なすのいづれかすの坊の村をわたり

そのとも基はうまうまけりたあつたけり

こゝまをて教へ給ふすねまの教へ小野宮右大臣

よんでまゝにけり

園軸院法書

あつたまひの孫をりつねまの二事とちよんたをて

貞治百首奇なりきうり秋田

前又細云甚良

風をひきの葉をうりぬれぬあそびの世に

文治のまじりし由屏風山中に菊蔵のむき

仙かろ

前中細言定家

あつたまひの孫をりぬれぬあそびの世に

無羽のまじりし由

藤原頭總相

あつたまひの孫をりぬれぬあそびの世に

弘安七年九月廿三日奇梅せりぬれぬあそびの世に

久とよと

龜山院法書

あまをまをたつらん社をあらりきてふりてあせり兼てはらりき  
位にたもしくきうたに形しくもせけりやあ

法皇御製

人の世のちき世よりたてあてやふかきにてあ自兼のむ  
法皇御製  
法皇御製  
法皇御製

藤原顯仲朝臣

よりの世のたつらん社をあらりきてふりてあせり兼てはらりき  
崇徳院位にたもしくきうたに形しくもせけりやあ  
後をたつらん社をあらりきてふりてあせり兼てはらりき  
百歩やみきのかもとあせり兼てはらりき  
崇徳院位にたもしくきうたに形しくもせけりやあ  
法皇御製  
法皇御製  
法皇御製

前文御言の家

あまをまをたつらん社をあらりきてふりてあせり兼てはらりき  
位にたもしくきうたに形しくもせけりやあ  
法皇御製  
法皇御製  
法皇御製

女苑人五代

あまをまをたつらん社をあらりきてふりてあせり兼てはらりき  
位にたもしくきうたに形しくもせけりやあ  
法皇御製  
法皇御製  
法皇御製

中臣祐親



中世より考ふる法華小位山をいふ所のけりる位は推定  
たは百首文を一つに

前大僧正良寛

毎座を考ふ十人とのさだ山をいふ所のけりる位は推定  
位三位為信

考はる中を考へけりる位は推定の考へたは推定といふ

小并

君をいふと合ふる位は推定の考へたは推定といふ  
性助は親王家の中首文を祝

入道前大僧正良

考へたは推定の考へたは推定の考へたは推定といふ

百首文を一つに

法皇法製

考へたは推定の考へたは推定の考へたは推定といふ  
考へたは推定の考へたは推定の考へたは推定といふ

前大僧正良

考へたは推定の考へたは推定の考へたは推定といふ  
考へたは推定の考へたは推定の考へたは推定といふ

考へたは推定の考へたは推定の考へたは推定といふ  
考へたは推定の考へたは推定の考へたは推定といふ

考へたは推定の考へたは推定の考へたは推定といふ

前中僧正良

月と日とのりきりてわたりきききつて戦ひのりきりて  
平貞時朝臣

わきまにむらりそとるふり義のりきりてわたりきききつて  
平貞時朝臣

海と空とをわたりて世をわたりてわたりきききつて  
平貞時朝臣

文永三年三月續古今集竟真年  
前大油言為氏

わたりきききつてわたりきききつて  
後法性寺入道前田曾右大臣のりきりて  
平貞時朝臣

わたりきききつてわたりきききつて  
平貞時朝臣

わたりきききつてわたりきききつて  
平貞時朝臣

わたりきききつてわたりきききつて  
平貞時朝臣

わたりきききつてわたりきききつて  
平貞時朝臣

わたりきききつてわたりきききつて  
平貞時朝臣

わたりきききつてわたりきききつて  
平貞時朝臣

わたりきききつてわたりきききつて  
平貞時朝臣

平貞時朝臣

平貞時朝臣

平貞時朝臣

平貞時朝臣

平貞時朝臣

平貞時朝臣

平貞時朝臣

平貞時朝臣

燒山をくたつ

ふえく〜ら次

口の舌のきせりけを焼くことものありあはゆたのりさ  
河内院以時寛治元年大嘗會舎徳統方風俗乃  
千千松系 前中御言匡房

三はあつあはれち〜父ゆつえあ〜きかけの  
たふりされ

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '焼山' and '千千松系'.*

千一

三

三

